

## マインドコントロールとは？

非日常的な暴力や薬物を使って、その人の思想を改造する洗脳とは違います。

### 解凍

個人が従前に持つ価値体系などを根底からゆさぶる。

崇りや過去の因縁、未来の滅亡や地獄など、様々な理由で私たちの恐怖を煽り、自分はまだ救われないという怖れを抱かせ、何かにすがりたいという依存心を高める。

### 変革

その集団の価値体系を植え付ける。

恐怖によって高まり切った依存心を利用して、唯一絶対の救いの主や教えを提示して、依存させる。

### 再凍結

植え付けられた価値体系を、自分のものとして定着させる。

集団への勧誘活動などを強制し、その教えに従うことを合理化させ、勧誘の成功や称賛によって自分の行為を正当化して定着させる。さらにノルマや集団への忠誠の態度によって引き続き「これではまだ救われない」という恐怖感を持続させ、コントロールする。

特別な教義を植え付けられるというより、自分の判断や思考・価値観などをすべて教祖や教団に委ねてしまう状態に置かれることが、マインドコントロールと言えます。

# カルト問題 学習の手引き

## カルト問題 とは？

「カルト問題」が、現代社会の問題となつて取り上げられ、マスコミの話題となることも多いのですが、どういう問題なのでしょう。「カルト問題」とは、自分たちの信仰と異なる信仰の問題ではありませんし、信仰上の異義や異端だけを問題にすることもありません。

「カルト問題」とは、それが表面上は宗教的行為にみえながら、実は信者となった人が、教団や教義に批判が許されず絶対服従させられ、労力と時間、資産などを不当に奪い取られることにあるのです。それは人権侵害であり、公共の秩序を著しく破壊してしまうことさえあります。

普通の人々が勧誘され、次第に教祖や教団の道具に仕立て上げられて、それから様々なものが奪われ、経済的にも社会的にも追い詰められたり、家庭生活が崩壊することが起こっています。

また、カルトとオカルトは全く別の問題です。オカルトとは超常現象のことで、カルト問題として顕在化した集団の教祖が空中浮揚ができると喧伝し、超能力に興味を持つ若い世代の関心を集めたため、混同されがちです。

# Cult



# カルトとは？

「カルト」についていろんな言い方ができますが、定義は確定していません。私たちと違う宗教であるとか、特定の集団がカルトと決めることはできません。「カルト」とは、私たち人間が一つの集団を形成する時に起こってくる問題です。ただカルト性の強い集団の集団的特徴は以下の4つにまとめられます。

- 1 過度な集団アイデンティティ → 教祖に従い教団に所属すること以外に自分の存在意味を持てなくなる。
- 2 個人生活の剥奪 → 個人として生活や社会生活が奪われる。
- 3 内外の批判封鎖 → 集団に対する批判を自分の中に持たないようにし、外からの批判も許さないようになる。
- 4 絶対服従 → 教祖や教団に自身の判断や思考・行動を全て委ねる。

このような集団的特徴を持つために以下のような傾向があります。

- 1 強いカリスマ支配  
唯一の救い主とされる絶対的な教祖の命令・意志に支配され、その教えに従うことが善であり、背くことに恐怖を抱くようコントロールする。
- 2 終末論(亡国論)  
間違いの無い予言として、世界が終わるとか、国が滅びると言い、様々な現代の状況をその予兆とし、恐怖心を煽りたてる。
- 3 罰論(応報論)  
世界・地球・国家が崩壊すること以上に、救世主や救いの教えを信じないこと、先祖や前世からの因縁で、地獄に落ちるとか処罰が与えられると言い募り、個人を脅し、心理的に恐怖心を定着させる。

さらに親鸞めずらしき法をもひろめず、如来の教法をわれも信じ、ひとにもおしえきかしむるばかりなり。そのほかは、なにをおしえて弟子といわんぞとおおせられつるなり。されば、とも同行なるべきものなり。これによりて、聖人は御同朋・御同行とこそかすきておおせられけり。  
(『御文』一帖目一通)

教えが説かれ、説かれた教えが聞かれる場である僧伽は、ともに教えを確かめ頷いて同じ高さで出会う場です。カルト集団はその僧伽が著しく歪み、絶対者や集団の支配の下に、追従・服従する姿になります。

「たとい弥陀に帰命すというとも、善知識なくは、いたずらごとなり。このゆえに、われらにおいては善知識ばかりをたのむべし」と云々。これも、うつしく当流の信心をえざるひとなりときこえたり。(略)されば善知識というは、阿弥陀仏に帰命せよといえるつかいなり。宿善開発して、善知識にあわずは往生はかなうべからざるなり。しかれども、帰するところの弥陀をすてて、ただ善知識ばかりを本とすべきこと、おおきなるあやまりなりとこころうべきものなり。  
(『御文』二帖目十一通)

本願の教えを生きておられる「よきひと」(先生)によって、私たちもまた阿弥陀仏の教えに出会うのですが、先生が救ってくださると錯覚したり、させられて、その先生(教祖)に依存してしまふのは、本来の在り方ではなく、「善知識だのみ」という問題として指摘されています。また、先生に救われるのではなく阿弥陀仏に救われるのだが、それはこの先生に依らなければだめなのだ、この先生だけが唯一阿弥陀仏の教えを語れるのだと決めつけ、他を否定することも同じ問題を孕んでいます。

それ越前の国にひろまるところの秘事法門といえることは、さらに仏法にてはなし。あさましき外道の法なり。これを信ずるものは、ながく無間地獄にしむべき業にて、いたずらごとなり。この秘事をなおも執心して、簡要とおもいて、ひとをへつらいたらさんものには、あいかまえて、あいかまえて、随逐すべからず。いそぎその秘事をいわんひとの手をはなれて、はやく、さずくるところの秘事をありのままに懺悔して、ひとにかたりあらわすべきものなり。  
(『御文』二帖目十四通)

教えを聞き確かめ合うのではなく、特別な儀式で救いに触れようとし、助かろうとします。その結果、誰の上にも確かめられる法ではなく、特別に選ばれた者の宗教になります。さらに仲間うちの秘密の技法とされ、神秘的なベールの中で、宗教性を誇示し、従わないものには祟りがあると脅す力にもなります。真宗では、こうした在り方を「秘事法門」と言い、問題にしてみました。